

# 過去のデータから生息適地「計算」

## 主任研究員 三橋弘宗さん



かつて絶滅危惧種がいた場所を知るにはどうしたら良いでしょうか。自然を保全・再生させるために適切な場所を予測するには、どのような方法があるでしょうか。こうした研究は、いま世界中の研究者が取り組む最先端の領域で、博物館が中心的な役割を担っています。収蔵庫には標本が集積され、タイムマシンを使わなければ収集できない昔の情報があるからです。貴重な情報が記された学術論文や地域の郷土資料、行政資料、同好会誌、新聞も保管。学芸員は資料の品質管理をしつつデータベースをつくり、過去の分布を

再現することができます。

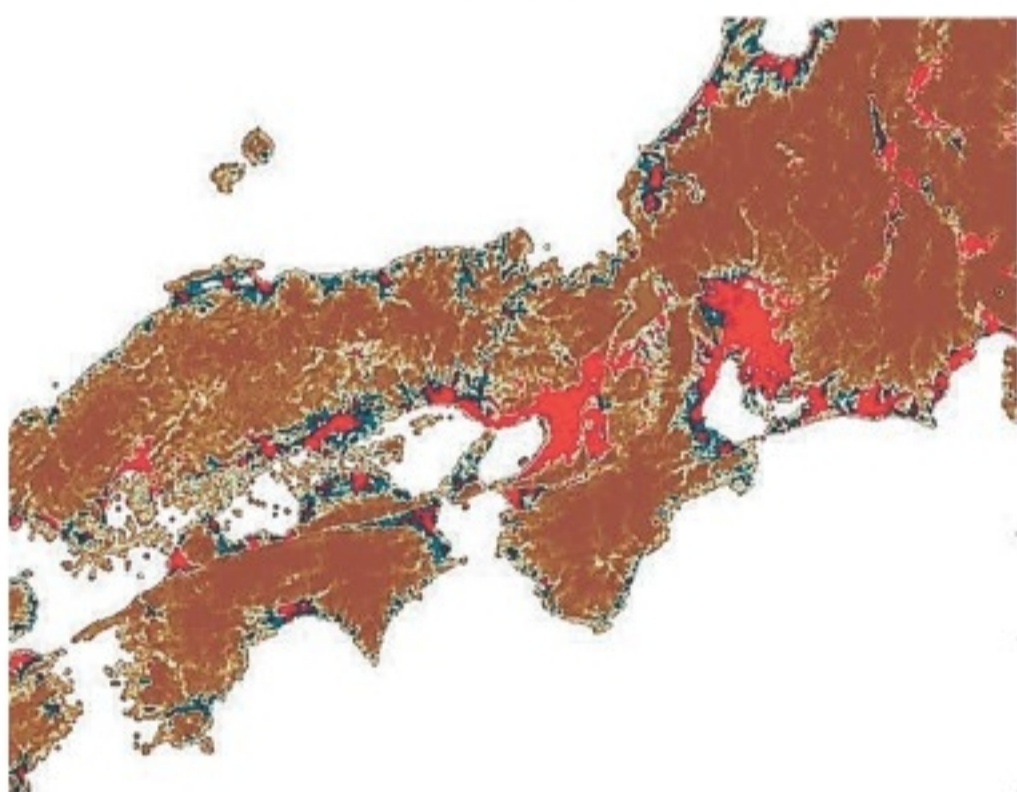
私の研究はデータベースを国内外の研究者と共有するための標準規格や体制づくり、システムの設計と実装を行い、兵庫県内外の野生生物や希少生物の分布情報の整備と発信を行うことです。

ただ、環境破壊が進む現在や未来の生物分布を予測するには過去の情報だけでは不十分で県内ですらカバーできません。そこで、分布情報に加えて、気温や降水量、地形の特徴、土地利用や森のつながりといった環境

情報を地図上で重ね合わせて、統計やシミュレーションで予測します。蓄積されたデータをどう調理するのか、そこが腕の見せどころです。

いくつかの野生生物を対象に、生息に適した場所を計算で求める考え方や計算手法、地形指標を開発し、生物多様性を保

ひとばく  
研究員  
だより



作成したコウノトリの生息適地図。赤が市街地で、茶色が不適地、青が適地を指す

全するための技術的な枠組みをパッケージにして実際の政策や事業として提案しています。生物多様性の保護区や自然再生の候補地の選定、鳥獣の管理計画や外来生物対策といった生態系管理に生かす技術開発です。

博物館では一貫して方法論の開発に携わり、コウノトリやオサンショウウオ、モリアオガエル、イワナ、ブナ、シカやクマなど数多くの野生生物の予測技術を開発しました。この分野に不可欠な「生物多様性情報」の整備には、自然史系博物館が中核を担っており、科学的根拠に基づく環境政策には欠かせません。

かつて生物の研究は「役に立たない趣味」とからかわれましたが、いまは違います。自然の記録や標本をしっかりと管理することが、生態系の保全や地域再生への近道であり、最重要課題です。博物館にしかできない伝統と先端技術の融合による新たな学際領域づくりに挑戦しています。